



Subaru

男声合唱団

ニュース732

'20. 5. 29

**昂の皆さんへ! 「緊急事態解除後」の
昂は今しばらく慎重に! 今後の合唱活
動に向けて、みなさんの思いを、情報交
換を!**

昂団員の皆さんへ

緊急事態宣言解除後の対応について

昂 役員一同

団員の皆さん、コロナ渦中、活動の自粛を強いられ、歌も歌えない中で、随分ストレスもたまる生活が続きますが、お元気ですか。

先日、5月末までの予定の「緊急事態」が順次解除され、大阪府域も解除となりました。早く合唱練習を再開したいところですが、感染リスクは依然として高く、慎重な対応が求められています。

5月9日にお知らせした昂の対応方針において、「自粛要請が解除され、公的施設での合唱行為等の利用が再開されるまで、レッスンは中止する」と決めました。

この度の解除に伴い、公的施設でも一部の利用が再開されておりますが、大阪市内の区民ホールにおいても、豊中市の公民館においても、会議での利用に限り可能とか、コーラスなど発声を伴う利用はできないなど、合唱練習を気兼ねなくできる環境には至っておりません。

改めて役員会で意見交換をした結果、**5月9日の決定全般を引き続き維持することを確認しました。当面6月末まで継続いたします。**

川妻さんからは、少人数による分割レッスンプランなどの積極的なご意見も頂きました。ご意見も参考に、6月21日に改めて役員会で協議することとしました。

皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

いずれにしても、このまま感染者が減少はしても、専門家によれば必ず2次、3次の大規模感染が起こると指摘されています。一般のインフルエンザのように社会的な免疫が成立するためには、年単位の時間が必要とされています。

また、我々は今後コロナウイルスと共存していかなければなりません。大規模感染が収まったからといって、また全く元の生活スタイルに戻る訳にはいきません。同じことを繰り返してしまうからです。

合唱活動においても、いかなる工夫が要るのか、立つべき新たな地面とはどんなものなのか、全員で考えていく必要があると思っています。

どうか皆さんの様々なご意見をお寄せください。

2020年5月27日

昴通信コーナー

No.2.

○コロナ、猛威をふるっていますね。時間を稼いでいるうちに、集団免疫を獲得してコロナ菌と共存していく道しかないのでしょうか。お世話ご苦労様です。
Subaru.mimu

○昴団員の皆様、自らの免疫力を高めてこの未知のウイルスに勝利しましょう。
そして元気で再開して、うたごえ・合唱活動の一日も早い再開を迎えましょう。【中谷清一】

○川妻さんから意見がありました。(みなさまからのご感想、ご意見をお願いします。)

いつもお世話になっております。いつまでもレッスンがないと日々の目標がなく、老化も進みそうなので早く正常に戻ってほしいです。ただ緊急事態宣言が解除になっても、合唱は3密が前提なのでレッスン再開は難しそうですね。

役員の皆さんでいろいろ検討していただいていると思いますが、暇に任せてなんとかいい方法がないかと考えてみました。すこしでもヒントにでもなればと思ったので送ります。(川妻)

「レッスン再開の試み できるだけ早いレッスン再開のための方策」

◎ 各パートを2分割し全体をA・Bの2班に分け、班ごとにレッスン日を設定して実施する。

・当面2班(各班15名程度)に分け、少人数で会場に散らばって歌うことで密(密集)を回避。

(より少人数にするため3班編成も可能)全員揃った通常レッスンは来年?以降に実施

○ 班別活動日(例)

第1金曜日 18:00~20:30...A班

第3金曜日 18:00~20:30...B班

第3日曜日前半14:00~15:30...A班

〃 後半15:30~17:00...B班

※ 日曜日は時間をずらして2班を実施する。体操や発声を省略したり、開始や終了時間を30分程度延長して時間確保することも検討(ピアニストの都合?)

※ 第5金曜、第5日曜(年内4回)は下記のように割り当てる

・7月第5金曜日 18:00~20:30...A班

・10月第5金曜日 18:00~20:30...B班

・8月第5日曜日 14:00~17:00...A・B班(前半後半)

・11月第5日曜日・14:00~17:00...A・B班(前半後半)

○ 上記のようにすればA・Bとも全員月2回、パート別レッスンと合わせ毎月3回レッスン実施可能。

○ レッスン参加はコロナの状況や各人の体調等に合わせ、個人の判断に任せる。

◎ レッスンの内容や方法の工夫

・入口に消毒液を設置。指揮者の前にビニールシートを立てて遮蔽する

・ねむかホールいっぱい広がって歌う。

・マスクして歌う(大声を出さない。口ずさむ程度。課題や要点を確認するなど)

※大声を出さないのなら窓を常時開放・扇風機で換気しながら歌うのも可?(外から確認必要)

・1曲のレッスンの最後のみ大声で歌う。1曲終了毎に窓開放・扇風機で強制換気(2~3分)する。

◎ レッスン曲について ※これは素人の独り言です。聞き流して下さい。

コンサートが6月に延期になり、高いレベルを求めれば課題はいくらでもあるので、1年近くもレッスン時間が確保できるのはいいのですが、私のように力のない者は、同じ曲ばかりを2年あまり続けても自分的にはあまり進歩が実感できないし、気分的にだれてしまいそうです。もともとあと5カ月ほどでコンサートを迎える所まで来ていたので、それ以上同じレッスンを続けるのは...という気分です。特に上記のように全員が揃わない状態でマスクして...では、ビシッと引き締まったレッスンになりにくいのではないかと思います。

そこで気分転換も兼ねて少しの時間でもいいので、14回コンサートで歌う新曲を決めて、何曲かのメロディを覚えたりしてはどうかと思うのです。基本だけやっておけば、13回コンサート終了後すぐ次の曲に移れるというメリットもあります。

○ パート別レッスンは上記同様の対策をして、通常通り再開(少人数のため密にはならない)

○ 声楽教室も通常通り再開

○ レッスン再開次第 団費・ピアニスト謝礼等は元に戻す。

○ 総会はねむかホールで実施するのなら、レッスン日にレッスンの代わりにすればいつでも可能です。

コロナと私たち



長崎大学教授(国際保健学) **山本太郎**さん

新型コロナウイルスの問題を多面的な視点から考える新シリーズ「コロナと私たち」
第1回は、感染症に詳しい山本太郎・長崎大学熱帯医学研究所教授に感染爆発の背景などについて聞きました。

坂口明記者

新型コロナウイルス アフリカなどに移動する可能性があり、注意が必要です。
感染の中心が中国、欧州、米国と移ってきました。今後は南米や

対策に国際協調が必要

アジアも含め新興国は財政的基盤や人的基盤が弱い。狭い家に10人が暮らすような所では、感染防止のための社会的距離を取るのが難しい。裕福な国でも社会的距離が取りやすいのは裕福な地域です。同じことが世界的

に起こります。先進国が新興国との貿易や人的交流を減らせば、感染流行が先進国に及ぶことは抑えられます。しかし新興国では流行が広がります。先進国側が自国のことだけを考えていると手遅れになります。国際協調が必要です。

世界同時多発で感染爆発が起きることは想定していましたが、今回の新型コロナウイルスの広がりの速さは想像以上でした。グロー

バル化(経済の地球規模化)を反映した現代的流行だと思えます。特に最近20年間、SARS(新型肺炎)、MERS(中東呼吸器症候群)、今回の新型コロナウイルスと、3回も新たなコロナウイルスが発生しています。頻度が高すぎ、異常です。

そもそも感染症発生は、人間が約1万年前に狩猟生活から農耕生活、定住社会に移行し、野生動物を家畜化したことなどです。それにより、野生動物に寄生していたウイルスが人に感染するようになります。ウイルスは人に寄生することにより、多様性を一気に増加させました。

天然痘患者がいなくなったことなどで1970年代後半には一感

染症を征服したという考え方も出てきました

た、しかし、その後生態系への人間の無秩序な進出、地球温暖化による熱帯雨林の縮小、それに伴う野生動物の生息域の縮小などにより、人と野生動物が接触する機会が増えました。

これにグローバル化による人の世界的な移動、大都市への人口集中が重なり、今回のようなパンデミック(世界的大流行)が起きたと思えます。

最近20年間の新型コロナウイルスの頻発は、新興国で人口が増え、自然生態系への人間の進出が加速し、森林破壊などで最後のフロンティアがなくなってきたことの影響が大きいと思えます。新型コロナウイルスが最初に見つかった中国も同様です。

パンデミックを起こすウイルスについて、「ウイルスが賢く、人間社会の弱点を巧みに突いてくる」と思われるかもしれませんが、そうではありません。ウイルスは少しずつ変化し、多くの種類があります。そこで人間社会の側が、社会に最も適したウイルスを選んでいる。グローバル

(注)「これらがパンデミックを起こすなかで人間は免疫を獲得しました。今の新型コロナも」

化し経済優先主義の今の社会で一番広がりやすいウイルスを、社会の側が引っ張り込んで

いる。そんなイメージで理解すればいいのではないのでしょうか。エイズの場合も、生

態系の破壊など発生の背景は今と同じです。それは旧植民地の医療政策や性産業などがあ

って広がりました。その意味で人間社会の側が、流行するウイルスを選んでいきます。



新型コロナで亡くなった医療従事者の名前を掲げて政府の対応に抗議するブラジルの看護師=5月12日、ブラジル(ロイター)



スペイン風邪が流行した米国で担架を運ぶ看護師ら=1918年10月、米ミズーリ州セントルイス(米議会図書館/ロイター)

「戦争」ではなく「共生」関係を築く

新型コロナは症状が出る前に広がるので、私たちが認知できた時には、根絶できる局面は過ぎていました。これに対処するには、ウイルスをなくす「戦争」ではなく、「共生」し、ある種の安定的な関係を築くしかありません。

風邪を起こすコロナウイルスは4種類ほどあります。これらがパンデミックを起こすなかで人間は免疫を獲得

出る。それが今の状況です。「戦争」には倒すべき敵があります。ウイルスは敵ではありません。倒すべき敵はありませんが、守るべきものがある。それは感染

出す。それが今の状況です。「戦争」には倒すべき敵があります。ウイルスは敵ではありません。倒すべき敵はありませんが、守るべきものがある。それは感染

家畜から人類に感染したと考えられる病気

人間の病気	最も近い病原体を持つ動物
麻疹(はしか)	イヌ
天然痘	ウシ
インフルエンザ	水禽(アヒル)
百日せき	ブタ、イヌ

山本太郎著『感染症と文明』による

世界で流行した主な感染症

14世紀	欧州で黒死病(ペスト)が流行。人口の3割前後にあたる2500万人が死亡
1918~19年	スペイン風邪
1976~	エボラ出血熱
1980	(WHOが天然痘根絶宣言)
1981~	エイズ
1996~	新型ヤコブ病
2002~03	SARS(新型肺炎)
2012~	MERS(中東呼吸器症候群)
2019~	新型コロナウイルス

やまもと・たろう=1964年生まれ。医師。アフリカ、ハイチなどで感染症対策に従事。著書に『感染症と文明』『新型コロナウイルスエンザ』『ハイチのちとの闘い』など

した人々、自爾で経済的に困窮した人々です。戦争に勝つために自棄するのではなく、守るべき人々をしっかりと守るために自棄するのです。

ウイルスは戦えば戦うほど変化するので、対応が難しくなります。だから仲良くするというのが「共生」の意義の一つです。より積極的な意義は、共生して免疫を持つことで、いろんな感染症に対し強靱（きょうじ）

んになるということです。具体的には、人的被害を最小化しつつ、感染やワクチン投与で人口の7割程度が免疫を獲得することです。初期の新型コロナウイルス患者1人が直接感染させる人数（基本再生産数）は2.5人から3人弱でした。そこで3人中2人（約7割）が免疫を持てば、患者1人から感染するのは1人未満になり、収束します。

1918年に起きたスペイン風邪では、世界の人口が18億人だった時に5億人が感染し、5千万〜1億人が死亡し、2年後に収束しました。今回も、対策次第で収束までの時間は違ってくるかもしれませんが、2年ぐらいは必要かもしれません。

持続可能社会へ転換を

今日の世界では、成長一辺倒に基づき、自然を使い尽くすような経済開発が進み、地球の持続性が疑問視されるほどになりました。そこで国連は「持続可能な開発目標」(SDGs)の実現を掲げています。今回のコロナ禍は、この「持続可能な経済成長」という問題点を突く形で起きています。これを契機に反省を深め、SDGs達成に方向転換する

ことが求められていると思います。

持続可能な開発目標(SDGs) 2015年9月の国連首脳会合で決まった国際社会の共通の目標。30年までに達成する17目標として▽貧困をなくす▽すべての人に健康と福祉を▽国内・国家間の格差是正▽気候変動に緊急対策を—などを掲げている。169の具体目標の中で、エイズなどの伝染病の根絶、感染症への対処をめざしている。



「コロナと私たち」

「新型コロナウイルス」と「共生する」とはどういうことか？ウイルスと人類の歴史から、今回のウイルスとこれからの私たち「人類」の関係をどう考えて生きていけばよいのか？この分野の専門家の国際保健学の山本先生の発言記事です。(しんぶん赤旗 2020.5.24) 編集子

(注)コロナウイルスに関連して、連日のように、各分野の専門家や報道・新聞等が発信しています。参考になるニュースや記事や投稿文がありましたら、広報部までお寄せ下さい。「知こそ力なり！」です。よろしくお願いします。



安倍皮饅頭

山口名物

皮は大変厚く、中はからっぽで餡も案も入っておりませんが、小さめのホワイトチョコでトッピングしてあります。「桜を見る会」での引き出物としてご好評をいただいている逸品です。2個入りセットを各世帯に無料配布いたします。



(焼きむらによっては、特定の人の顔に見えることがありますがあしからず。)

おすそ分け

皆様

友人から贈られてきましたので、おすそ分けです。

ご賞味ください。

(再掲) 千秋教室のみなさんへ (昴ニュース731号より)

コロナで歌が歌えない状態が続いています。
急に声出しすると、余りよくないようです
息だし、から、声出し(巻き舌)で、を週に2~3回目標にお願いします。

添付資料を壁に貼りだししてみてください
一日も早く、千秋教室/昴レッスンの再開をしたいです。

週に2~3回やりましょう

- 1、椅子に座って 意識を丹田に集中する
- 2、息を吐く→体をゆるめる→長く吐く
とにかく、ゆったり、焦らない
- 3、S——（歯と歯を合わせるだけ）で、通り道を確認する
- 4、S——で丹田が出発点になっているか、確認する
- 5、S——リップロールか巻き舌で（無声）
- 6、リップロールか巻き舌で（有声）
音階は気にせず、びゅーんと下から上まで、上から下まで、好きな音で
- 7、椅子から立って、同じような好きな音で、リップロールか巻き舌で
滑らかになるまで

（参考資料） 「次に来る問題」 本山秀毅

大阪音大学長の本山秀毅先生が、Faceook に投稿したものです。本山氏は、数多くの合唱団を指揮するとともに、京都バッハ合唱団を主宰されている人です。

我々の考えの参考になるかも転載しました。（山本宏司）

「緊急事態宣言の解除を受けて、世の中は以前の姿を取り戻そうと動き始めているように見える。しかしこの感染症の与えた影響はすべての事柄を元通りに戻せるとは限らないほど大きなものであり、たとえその方向を見出せたとしても想定外に時間がかかる予感がある。それは、実際に顕在化する影響よりも、人々の心理に与えたものの大きさに由来するのかもしれない。その「心理」に抗うことができるものは一体何なのか？

6月から公民館などの施設が使用可能になる地域がある。それに先立って以前と同じように練習のための使用を申し込んだところ、合唱練習については許可出来ないという通告を受けたという事例が各地で報告されている。兵庫県芦屋市の例を合唱指揮者の西牧潤氏が詳細にレポートされているフェイスブックの記事も参照されたい。

たとえ僅かでも生命に関わるような判断を迫られた時に、後にその判断基準と方策についての説明責任を伴うことは必須である。そしてその判断基準については、憶測や思い込みなどによるものではなく、科学的な知見に基づくものでなければならない。

先日来、ドイツのオーケストラや合唱団がエアロゾルの飛沫の拡散について綿密な実証実験をしている様子がドイツ在住の方から発信され、大きな反響をもって受け止められていることをご存じの方も多いただろう。彼らの実証は、職業音楽家としての「職場」を守るために必要不可欠なものなのである。ここにドイツという国における音楽の存在感が示される。そしてその精密なデータこそが、今後の彼らの活動の動向や、ひいては生活を左右することに直結することは言うまでもない。それだけ「音楽」が人々の生活に結び付いている～ここでは果実を享受することではなく、生活の糧としての音楽である～ことを明確に示している。

もちろん、我が国においても同じ立場にいる人は少なくない。自分たちの環境を守るためには一体何が必要なのかについての情報を、先の見えないコロナ禍の中で渴望していた状況ゆえにこれらの情報に大きな関心が集まるのだ。

それらの知見は大いに参考にするべきだろう。しかし、その情報をただ単に受け入れるだけではなく、われわれの周囲でも然るべき機関によってこの種の実証が行われるべきではないだろうか。先日、愛知県

立芸大音楽学部の先生方が、実際に授業で使用する教室において、空気の対流を調べる実証実験を行われている様子がアップされていた。授業を始めるにあたって学生の安全を守るために実証的に行動される姿勢に深く感銘を受けた。

多くの合唱人が数か月の禁足期間を経て元通りの環境を望んでいることは容易に拝察できる。またその一方で、伝えられる幾つかの合唱団を通してのカタストロフが、容易に払拭できない先入観を与えていることは紛れもない事実である。

もし私が公民館の責任者であれば、おそらく慎重な対応にならざるを得ないだろう。それは自分自身に正確な知見が不足していることに由来するものであり、責任を果たすということ意味において、先に述べた説明責任を伴う判断基準と方策が必要であるからだ。これは行政の責任者だけではなく、合唱団を統率される方にも共通する重い判断を伴う課題である。

しかし同時に、この状態がいつまでも続くようであれば、共に歌うことに今より良い状態は望むべくもない。私は、身近に合唱の分野において、ドイツのような実証実験を行うことが必要ではないかと考えている。それは、再開を何が何でも望むという偏った立場からではなく、先入観の全くない純粋に科学的な見地から、合理的な一つの基準が示されるために行われることが必要である。なぜならそこには他でもない人間の生命に関わる決断が含まれているからである。

実際の調査は、ある程度オーソライズされた機関に委嘱する必要があるだろう。また多くの人たちがその結果を共有することが望ましい。そしてその情報が合唱愛好家だけではなく、それを支える周囲の人たち、たとえば公民館の責任者のような立場の人にもまで伝わる必要があるのではないだろうか。

それでは一体、どこの誰がこのような案件を担うのか。たとえば、全国的に合唱団活動を束ねる大きな組織が、合唱団の活動について、以前のような合唱活動再開へ道筋をつける意味と、合唱人の「前のめり」の姿勢に警告し生命の危険から守るための両面から、今こそ動いてもよいのではないかと考えるのだが、いかがなものだろうか。

「詩一遍」 千秋昌弘 (皆様 今の思いを書き綴りました)

教えられた大切なもの
千秋昌弘

大自然の中
人類は
数十万の犠牲者を出し
発展の歩を止めた
ウイルスとの共存
見えないものを
真剣に怖れ
家に引きこもった
いつまで続くのか
先行きの見えぬ不安
現場では命がけの
治療
死んでも
誰とも会えず
骨となって逝く
こわさ
人間の叡智が
光を与えてくれる
きつと治る
きつと日常に戻る

その先に
新しい世界が広がる
抑圧でなく
自主的規律で歩む
人々を尊び
日常の生活と
命の大切さと
平和を喜ぶ
命を守る
政治の大切さを
ウイルスが
教えてくれた
2020.5.13